

ニュージーランドにおける語学留学の実態

——クライストチャーチの場合——

宮田 学

1. 調査の概要

1995年7月下旬より約3か月間、標記のテーマで実態調査に従事することができた。最初の1か月を調査のための資料収集と準備にあて、残りの2か月を調査に費やした。語学留学の実態をできるだけ立体的にとらえることを目指して、語学学校におけるカリキュラム、教材、教授法などの客観的な事実を収集・記録する一方で、教師や学生の個人的な情報も集められるように計画した。

クライストチャーチには15ほどの語学学校があり、8校から訪問の許可が下りた。そのうち7校にて授業観察するとともに、そこで学ぶ日本人学生を対象に（総計123名）アンケート調査を行った。さらに、学生18人と教師3人にインタビューができた。[表1参照]

[表1] 語学学校別調査内容一覧

学校	アンケート回答者数		インタビュー		授業参観				教師へのインタビュー
	男性	女性	男性	女性	初級	中級	上級	その他	
A校	8	4	2			1	1	1	1
B校	3	6	1			2			
C校	12	12	2	3		1		1	
D校	4	8		2	1		1		
E校	8	12	3	3	1	1	1		
F校	6	10		2				1	1
G校	8	22							
H校	—	—	—	—	—	—	—	—	—
I校	—	—	—	—	—	—	—	—	1
合計	49	74	8	10	2	6	3	3	3

※1 訪問できた順にA校～H校とした。I校は訪問していない。

※2 H校では、コースの概要を聞き、施設を案内していただいたのみ。

※3 I校は、同校に勤務している教師にインタビューしたのみ。

授業は、なるべく異なったレベルのクラスを参観できるように依頼して、テープレコーダーとカメラで記録した。アンケートとインタビューでは、学生たちの英語学習歴、留学にいたるまでの経過、語学研修の成果、今後の予定などをたずねた。教師へのインタビューでは、日本人学生の印象や、指導上の問題点を中心にたずねた。

本稿では、こうした調査結果の分析を中心に、クライストチャーチにおける語学留学の実態を報告したい。

2. クライストチャーチの語学学校

日本から東南の方角約 9,000kmの位置に、日本の本州と九州を合わせたほどの国土にわずかに人口約354万人のニュージーランド（以下、NZと表記）がある。南北2つの島を中心に数多くの小島から成るこの国には、重工業があまり発達しなかったこともあって、豊かな自然がいたる所に残されており、新鮮でおいしい空気と水を味わえる。

クライストチャーチは、南島のカンタベリー平野の中心に位置する。人口は、オークランド、ウェリントンについて3番目の約32万人である。町の中央部をエイボン川が流れ、イギリスで見かけるような落ち着いた町並が広がり、“Garden City”という愛称で呼ばれている。

訪問した8つの学校のうち2校を除き、すべてクライストチャーチの中心部に教室を持ち、日本、韓国、タイなどのアジア系とスイス、ドイツなどのヨーロッパ系の学生たちにESL（=English as a Second Language）を教えている。学校によってカリキュラムに多少の違いはあるものの、ほぼ次のような内容の英語教育を用意している。

- 一般英語コース（General English Courses）と資格試験コース（Exam Preparation Courses）が選択できる。
- 一般英語コースでは、到達度別にクラス編成を行う。
- 資格試験としては、Cambridge¹、TOEFLのほか、IELTS²などがある。
- 6～8名という小人数のクラス編成を原則としている。公立の語学学校（2校）では、やや多めの10～12名を標準としている。
- 午前9時頃～12時前後、午後1時前後～3時頃というような時間割りで、1日5時間、週25時間ほどの授業時間を標準としている。
- 教師はNZ人、オーストラリア人あるいはイギリス系の有資格者。
- NZ人の家庭にホームステイする方式を奨め、そのあっせんをしてくれる。
- 週末には様々なイベントが計画され、好きな活動に参加できるようになっている。

3. アンケート調査のねらい

大学英語教育学会（JACET）の行った実態調査³のアンケート項目を参考にしながら、『語学留学に関するアンケート』を作成した。完成した調査用紙は、[A] あなた自身について（4項目）[B] 英語の学習歴（3項目）[C] 語学留学の動機・目的（2項目）[D] 語学研修に

ついて(12項目)[E]日本の英語教育について(4項目)の計24項目から成っている。[A]では、性別、年齢、所属、海外での生活体験を、[B]では、正規の英語教育以外の学習体験を、[C]では、語学留学の動機と目的をたずねた。[D]では、語学研修の期間、授業のレベルと内容、先生・学生の人数、住まい、自習時間などをたずね、語学研修の成果を自己評価したり、日本で受けた授業との違いを記述してもらった。さらに[E]では、日本の英語教育について評価してもらうとともに、改善のための提言を述べてもらった。

アンケート調査は、日本の夏休みにあたる時期を避け、95年9月上旬から10月中旬にかけて実施した。夏休みは、NZに限らず、いわゆる<短期語学留学>の典型で、滞在期間が2～3週間などときわめて短いものが多く、語学研修に置かれる比重も相対的に低くなり、観光を兼ねた異文化体験の色彩が強くなる傾向が見られるように思う。当然、日本人学生の数が増え、8月も終わりに近づく頃には、急減する。今回の調査では、海外での修学旅行的な気持ちで語学学校に通うような学生を対象からはずしたいと考えた。

アンケートのねらいは、したがって、英語力のレベルアップを目指して比較的熱心に勉強に励んでいる人たちを対象に、その英語学習の過去と現在を明らかにしながら、NZでの英語教育を受けてどのような成果を上げ、どのような感想を抱いているのか、また、ひるがえって、日本における英語教育に対してどんな意見を持っているのかを集約することにあつた。

アンケート調査の結果を以下、4節～6節に分けて紹介するが、[資料]に、自由記述部分を除いた全結果を一覧できるように整理したので、ご覧いただきたい。

4. 日本人留学生の実態

(1) アンケート回答者

男性49名(40%)女性74名(60%)、合計123名からの回答を得た。20～24歳の年齢層が一番多く(51%)、次いで15～19歳(22%)、25～29歳(20%)であった。所属は、「その他」が圧倒的に多かった(54%)。これは、高校または短大・四大を卒業してから日本を離れたためである。次いで、社会人(19%)、四大生(15%)となっている。海外での生活経験がない人が55%、経験者も、その大半が3か月以内である。

中学入学以前に英語を学習したことがある人は25%と少ないが、中学校以降に課外で(自分で)英会話の勉強をした人は66%にのぼる。また、英検などの資格試験を受けたことのある人は66%であり、受けたことがなくても、その3分の1に相当する人が「将来受ける予定」と答えている。

NZでの語学研修期間は、「まだ始めたばかり」の人(15%)から「始めて1年を超える」人(12%)まで、さまざまである。しかし、「6か月以内」の人をすべて合わせると全体の74%に達している。今後の滞在予定についても、「まだわからない」(8%)から「2年を超える」(7%)までさまざまであるが、「6か月以内」までに全体の67%の人が入っている。

単独でホームステイしている人が一番多く(59%)、次いで、ほかの外国人学生とアパート(NZでは、flat=フラットと呼ぶ)に暮らしている人(16%)が多い。

(2)留学の動機・目的

留学のきっかけは、「英語圏で暮らすのが英語に上達するよい方法だから」というのがもっとも多く(51%)、次いで「海外で生活したいと思っていた」(44%)、「英語圏の文化・社会に触れたかった」(33%)となっている。

目的としては、「日常会話ができるようになるため」がほかを引き離している(55%)。次いで、「英語力の全体的なレベルアップ」(40%)、「仕事で英語を使う」(25%)となっている。

(3)留学生の素顔

アンケート用紙の最後に「この回答に関するインタビューに応じてよいと思われる方は、お名前と連絡先をお書きください」としたところ、25名の学生が応じてくれた。スケジュールを調整してインタビューできたのは、このうちの18名であった。

実際に会って話を聞くと、アンケートの数字以上に、実にさまざまな動機、目的、計画でNZに来ているということがわかった。ここでは、18人の中から、なるべく異なった年齢層の、異なったタイプの留学生6人を選び、その素顔に迫ってみようと思う。以下、年齢順に紹介する。

(ア) TKさん=大学志望型

C校にて一般英語コースの上級クラスに在籍している19歳の女性。94年春に高校卒業後、専門学校のホテル科に入学した。専門学校には海外留学制度があり、その制度を利用して、入学後すぐの5月にNZにやって来た。最初は9か月の予定であったが、そのままNZの大学に入って勉強することに変更し、95年の2月にいったん日本に帰り、専門学校の退学手続きなどをすませて、再びC校にて英語の研修に励んでいる。

今のところ、クライストチャーチにあるカンタベリー大学、リンカーン大学あるいはポリテクニク(高等専門学校)に入って、マーケティング関係か、やはりホテル関係の勉強をしたいと考えている。そのためには、例えばTOEFLで550点以上とらなくてはならないので、現在のクラスからCambridge CAEのコースに移って、さらに英語力をつけたいと言う。Cambridgeは、すでにPETとFCEに合格しており、かなりの実力があると見た。

在籍しているクラスはC校でもトップレベルなのだが、「レベルの高いクラスに入っていないと怠けてしまうから、必死になってついていかなくてはならないくらいのレベルのクラス」で勉強しようと、さらに上のクラスを目指しているのだと言う。

ホームステイしているが、そこには子供が3人(10代前半の娘ばかり)いるほか、韓国からの女子留学生(地元の高校に通っている)もいる。通学するにはバスを乗り継いで1時間以上かかるが、勉強に打ち込める環境がとても気に入り、最初からずっと同じ家庭にいる。ちなみに、ホームステイ代は1週間120ドル(約9,600円)で、3食付のうえ洗濯もしてもらえるとのことである。

語学研修全般について「とても満足」しており、英語力もすべての分野にわたって成果が「十分にあった」と自己評価している。そう判断した理由は、1年前の5月(=16か月前)には、Yes, Noで答えるのが精一杯だったのが、日常会話はもちろんのこと、テレビを見てもわかる

ようになったからであると言う。そんな彼女も、NZに来て5～6か月たった頃にスランプに陥ったそうで、それまで順調に伸びてきたはずなのに、急に英語を聞きたく（話したく）なくなり、ホストファミリーの人とも話をしなかった時期があったと言う。

今の時点で一番感ずるのは語彙不足であり、中学校・高校を通じてもっと単語の勉強をしておけばよかったと思っている。と同時に、どれだけ単語を知っていても、自分のものとして話せるだけの知識を身につけていないとだめ、ということも痛感している。だから、語彙力をつけてから留学するように、と後輩にアドバイスを送る。そして、留学してからは、赤ちゃんになったつもりでゼロからスタートし、どんなことにも興味をもって、食欲に吸収することだと忠告している。

自分自身に厳しく、NZでの生活を意義あるものにしようと努力している〈大学志望型〉の留学生である。

(イ) KSさん=のんびり型

高専を卒業後、コンピュータ関係の会社に勤めていたが、それを辞めてクライストチャーチにやって来た23歳の男性。最初は「休職して海外へ」と考えていたが、会社がそれを許してくれなかったので、退職することになったそうである。

とにかく海外で生活したいと思っていたことと、次の就職をする時に英語が武器になるだろうと考えて留学を決意した。ワーキングホリディの制度⁴を利用して1年間NZに滞在し、その後のことは日本に帰ってから決めればよいと思っている。

ヨーロッパ人が多いらしいということ、人数が少ないらしいということで、E校を選んだが、人数の点では必ずしもそうとは言えなかったようだ。現在のクラス（一般英語コース）は、レベルも内容も「普通」と判断している。自分としてはすでにわかっていることをやっているのレベルは高くなく、むしろ低いほうであろうと言う。特に午後は一番下のクラス（3人）なので、タイ人とスイス人のレベルが自分よりも低く、先生がそちらの指導に時間をさくため、不満がある。しかし、わかっていることであっても、それを使うことによって使えるようになるし、聞く力がまったくないので、低いレベルで勉強したほうがよいと考えている。したがって、クラス替えを希望すれば対応してくれるはずだが、今のまま続けるつもりである。

中学生時代に英語は嫌いではなかったが、成績は理系のほうがよかったので、高専に進んだ。読む力は多少あると思っているが、聞くほうがだめで、単語と単語を続けて発音されると、まったくわからなくなる。話すのも語彙不足で苦しんでいる。韓国人留学生とともに母子家庭の家にホームステイしているが、8歳の女の子には、結局口をきいてもらえなくなった。大学の図書館に勤めているホストマザーとは、中古車を買う件で相談にのってもらう時などに、何度も聞き返して、努力している。とはいえ、話す時間があまり取れないこと、話す話題があまりないことなどで、十分とは言えないようだ。

まだ4週間目なので、勉強の効果があつたかどうかかわからないが、自分としてはあまり進歩していないように思っている。だから、語学研修全体について「やや不満」という評価をしている。

あと2か月は英語の勉強をし、その後はNZ国内を旅行するつもりでいるが、それ以降は白紙の状態。よい仕事があればやってもよいと思っているし、日本から出かけるよりも航空運賃が安いので、イギリスとフランスへ旅行することもありうると言う。

明確な目標はないが、自分なりに海外での生活を楽しもうという、〈のんびり型〉の留学生である。したがって、後輩へのアドバイスを求めると、「自分で納得できればいいんじゃないですか」という答えが返ってきた。

(ウ) KTさん=目的変更型

外科の病院で7年間看護婦の仕事をしていたのを辞めて、NZにやって来た28歳の女性。ハワイやグアムへ2～3回旅行した時に、やはり英語が話せるとよいと感じて、英会話学校へ通い始め、さらに語学留学したいと考えるようになった。「やりたいと思った時に行動しないと、後で後悔するので」思い切って退職した。まず、ワーキングホリディの制度が利用できて、しかも年齢が30歳までというNZを留学先に選び、次に英会話学校の推薦でE校を選んだ。

一般英語コースに籍を置き、午前のクラスは10名で、文法・語法を中心に勉強する。この授業は自分のレベルよりも低いが、午後の会話中心のクラス(4名)は程度が高いと感じている。自分の希望には「合っている」と思う。英語は、中1のごく初期の頃を除き、ずっと嫌いな科目だった。特に聞く力がなかったのが、3か月ほどたった今では、たまに聞こえる単語が出てくるようになった。成果としては、「普通」くらいに思っているが、語学研修全体としては「満足している」ほうである(=不満はない)。

日本で英会話学校に通った経験からは、留学しなくても話し言葉としての英語は身につくと思うものの、自分にはそれができなかったと言う。授業中は日本語を使わないでいられたが、日常生活で日本語の世界に戻ってしまうのを避けられなかったからだと思っている。だから、NZでは日本人どうしかたまらないように、と心がけてはいるが、なかなか思い切ってできないことが悩みである。

後輩へのアドバイスも、したがって、「日本人どうしかたまらない」ということにつきると言う。E校では新しいケンブリッジ英語検定試験コースが始まり、ヨーロッパ系の学生が30人ほどやって来たので、自分としては、そういう機会を生かしたいと願っている。

最初は、海外旅行の時に困らない程度の英語力を身につけたいと思ってやって来たが、今では、アメリカに出かけて「人工肛門専門ナース」の資格を取ると言う、別の目標ができたと言う。現在のコースが終了したら、1か月ほどNZ国内を旅行したあと、再びE校で英語の勉強をし、8か月(通算1年)後には日本に帰る予定。そこで体勢を立て直して、アメリカに出かけようと思っている。

語学留学することによって新たな目標を見つけ、日本での再就職につなげようとするようになった〈目的変更型〉の留学生である。

(エ) STさん=ハイレベル志向型

A校のIELTSコースにて勉強している29才の男性。日本では農芸化学科で微生物学を学び、

北海道でワインの醸造に携わっていた。「日本は基本的にワインを飲む国ではないから、よいワインを作ることは難しい」と考え、ワインの輸入にかかわる仕事に転向することを思い立ち、ワーキングホリディの制度を利用してNZにやって来た。語学学校をあっせんするエイジェントの紹介で、95年4月にA校へ出かけてみたところ、24～25才の大人の学生が多く、日本人でテストに合格している人がいるということを知り、A校に決めたと言う。

IELTSのクラスは一般英語クラスよりもハードではあるが、本来の目的を達成するという点から、「自分の希望と合っている」と判断している。A校にはIELTSの試験官をしている先生がスタッフにいますので、都合がよいとのことである。今のコースが終了したら、Cambridge FCEのコースでさらに勉強を続ける、と意気込んでいます。

語学研修を始めて5か月になるが、全体的には「満足」している。分野別には、成果が「あった」または「普通」と自己評価している。テレビやラジオの英語はいぜんとして苦しいものの、普段の会話では、最初わからなくても一度聞き直せばわかる程度になった。自分の思っていることを表現できなくて言い直すことがほとんどなくなってきているので、話す力も伸びたと判断している。それでも、話す分野の成果が「あった」と評価していないのは、「自分の思ったほどには上達していないから」である。読むのはよくできるが、話すとなると、例えば〈時制〉がうまく使えない。基礎的な文法の勉強ができていればよかったのに、と思っている。大学が理科系であったため、英語の論文をよく読んだことが、語彙力や読む力につながったと思っている。

海外で英語を学ぼうとする後輩に対しては、「目的をしっかりと持つように」というアドバイスを与えている。語学学校にはたいい日本人がいる。日本語で話すことはリフレッシュ効果があるものの、それに流される傾向の人がいる、と指摘する。目的を明確にしてやってくれば、そうならないように自己規制できるのではないかと、言うのである。NZの男性とフラット生活をしているのも、こうしたしっかりとした目的意識の表れかもしれない。

日本での仕事を辞め、明確な目的を持って語学研修に励む〈ハイレベル志向型〉の留学生である。

(オ) TTさん＝手段重視型

アンケートに答えてくれた女性の留学生で、最高年齢の51歳。D校の一般英語コースで勉強を始めて3週間目に入ったところである。夫婦ともに教師をしていたのだが、いつかは海外の日本人学校で仕事をしたいと考えていたので、以前から英語に興味を持っていた奥様のほうが教職を辞して、3か月の予定でNZにやって来た。ご自身は、主に小学校で国語を教えていたそうである。

日本を出ている留学情報誌を見て学校を決めたのだそうで、小規模であること、町の中心にあって便利そうなことなどでD校にしたのだと言う。クラスのレベルは「高いほう」と思っているが、特に午前中の授業が文法中心で、自分にとっては難しいことがその理由である。文法や語法についての説明が英語でなされると、さらに難しい単語が使われたり、簡単なことが複雑になるからではないかと、分析している。

語学研修について、全体的には「満足」しているほうではあるが、勉強の成果のほどはまだわからない。聞く分野での不足を感じていて、自分が知っている言葉が聞こえるように訓練してほしいと願っている。

学校では日本人が多いこともあって、昼休みなど、つい日本人どうしが集まってしまうがちなので、なるべくそうしないようにと心がけている。韓国から来ている留学生が日本語に興味をもっているようなので、お互いの国の言葉を教え合おうと、英語でコミュニケーションしている。

学校だけでなく、ほかの場所でも積極的に行動できるとよいのだが、なかなかできないでいる。ホームステイ先には7～11歳の子供が4人いるので、いい先生役をつとめてくれるのだが、接触する時間が不足気味で、残念に思っている。

中・高・大の英語学習をごく普通にやっただけで、ラジオ講座で英語を聞くというようなことをしなかったのが、後悔している。教職についてからは、教材研究など教師としての仕事に追われ、英語の勉強をする時間がなかった。それでも、二人の子どもが高校受験の時などにつき合ったり、子どもと一緒に英語のテープを聞いたりしたことはある。海外の日本人学校のことを考え始めてからは、機会をみつけては自分で英語の勉強をするようになった。

これから留学する人たちに対し、「自分の意見を持つことです」と言い切っていた。日本人があまり自己主張しない（できない）ということ、英語で実際にやりとりする中で、さらに一層感ずるようになったようである。

具体的な目標に向かって、短期間で英語を使える道具にしようとする〈手段重視型〉の留学生である。

(カ) YNさん＝再出発型

アンケート回答者の中で最高年齢の56歳男性。日本では、大手自動車会社の課長の職にあった。それだけに、留学に至る事情にはいろいろなことがかかわっていたようである。

52歳の時に、会社の近くにあった英会話学校の無料体験学習に2週間参加する。その後、ほかの仲間が3か月ほどでやめてしまうのに、自分は2年近く英会話学校に通い続けた。授業そのものはそれほどではなかったが、どきどき先生と飲みに行ったりすると、リラックスして話ができ面白かった。一方、会社では、タイ、中国、台湾、韓国、アメリカなどから研修生や見学者がやってくる。すると、通訳を交えて話をしていた。それが、自分には不自然に思われた。自分自身も、アジア各国へ海外出張するようになった。カナダへ出かけた時には、豊かな自然とゆったりとした生活ペースにひかれた。そんな時期に、同じ年齢層の同僚が、ストレスや癌などで亡くなるケースが目だってきた。そこで、60歳の定年を迎えてからではなく、その5年前に会社を辞め、海外で生活しようと計画した。

英会話学校の先生がNZ人であったこと、日本人の知人がE校で勉強したことがあるということで、留学先を決めた。本当は夫婦で来たかったが、奥様の仕事の都合で単身NZへやって来た。話すほうは度胸である程度はできるようになっていたが、文法と聞き取りが弱い。だから、現在

の一般英語コース（中級クラス）は、自分にとってレベルは「高い」が「合っている」と判断している。

NZに来て丸2か月が過ぎたが、勉強の成果としては、少しはあったかという程度。授業で文法的な誤りを直されたりするため、慎重になりすぎているところがあるかも知れない。若干、自信を失っている状態である。しかし、授業以外では、英語を使ってそれなりの生活を送っているし、旅行社へ出かけてプランを練る時など必要に応じてきちんとした英語を使う機会もあるので、全体としては「満足」している。

今になって思うことは、もっと早い時期に海外に目を向け、40代初期に英会話の勉強を始めていればよかったのということ。上達の速い若い人が身近にいと、それを痛感すると言う。それが後輩へのアドバイスである。

1年間はNZで英語の勉強をするつもりでいる。その後は、過去の経験と英語を生かして貿易コンサルタントの仲間に加わるか、あるいは翻訳の仕事をするかという、2つの選択肢がある。しかしながら、ストレス社会の日本を脱出して英語の勉強をするというのが所期の目的だったので、将来の計画をあまり具体化しないで、現在の生活を楽しみたいと思っている様子であった。

熟年に達してから人生をやり直そうと、長期計画でコース変更を試み始めた〈再出発型〉の留学生である。

5. 語学研修の実態

(1) 語学研修のクラス

アンケートによると、所属クラスの人数は、3人(3%)から12人(7%)まで幅がある。教えてもらう先生の数は、1人(20%)または2人(56%)が多い。

所属クラスの英語レベルを「1(とても低い)」から「5(とても高い)」で判断してもらったところ、「3(中くらい)」(53%) → 「4」(24%) → 「2」(17%)の順であった。一方、授業内容が希望と合っているかどうかを「1(まったく合わない)」から「5(とても合う)」で判断してもらったところ、「2」(15%) 「3」(33%) 「4」(33%) 「5」(16%)に評価が分かれた。

(2) 語学学校の教員スタッフ

E校のパンフレットには、学校長以下20名の教員スタッフが紹介してある。学歴・資格の項目を見ると、MA、BA、BSc、BEd、Dip Ed、Dip Teach、Dip TEFLなどのほか、RSA Dip TEFLAあるいはRSA Cert TEFLAという文字が繰り返し出てくる。数えてみると、8つある。つまり、スタッフの4割にあたる教師がこの資格を持っていることになる。

RSAはRoyal Society of Arts(ビジネス・秘書関係、英語教師などの資格試験を統轄するイギリスの機関)の略であり、Dip、Cert、TEFLAは、それぞれDiploma、Certificate、Teaching of English as a Foreign Language to Adultsの略である。Certificateのほうは、RSA Cambridge CTEFLA[シー・テフラ]と普通呼ばれ、NZの語学学校でESLを教えるために最低限必要とされる資格と言われている。この資格を取得するためには、UCLES(=The

University of Cambridge Local Examinations Syndicate) が認めた教育機関にて、4週間にわたる集中の講義／演習／実習を受けなくてはならない。95年10月の時点で、このコースの認可を受けている教育機関はNZに6箇所あるが、クライストチャーチではH校のみである。後述するA校のSB先生も、カンタベリー大学を卒業後ここで資格を取ってから、ESLを教え始めた。Diplomaのほうは、RSA Cambridge DTEFLAと呼ばれ、3か月のコースとなっている。現時点では、北島のオークランドまで出かけなくてはならない。

RSA Cambridgeの資格は世界的に通用するものなので、G校でもコースの認可を受けたいと考えているが、実現するのはかなり困難なようだ。そこで、アジア系の国から現職の英語教員を受け入れて、教室での実践に役立つプログラムを用意しようとしている。そうした話をしてくれたG校のCC先生によると、語学学校で教えている教師の学歴は、その半分以上が大学卒の学士号保持者、半分以上が教員養成大学(College of Education)の出身で、高校卒の教師はほんのわずか(1~2人)ではないかと言う。また、後述するF校のGA先生によると、7~8月の時期に夏休みを利用してNZにやって来る学生が急増すると、日本で(ESL/EFLの資格なしで)英語を教えた経験のある人が、その経験を買われて教えることがある。あるいは、NZの中・高で英語を教えていた人が転向してESLの教師になる場合も多いらしい。

E校のパンフレットによると、一人を除いてすべての教師にTEFLもしくはTEFLA関係の資格がある。ほかの語学学校については、こうした紹介がないので、想像するしかないが、やはり学生が増える時期には、経験が優先し、ESL/EFLの資格がない先生に教わるということもありそうである。

(3) 授業の実際

7つの語学学校で参観した授業は14にのぼる。授業の手順や手法そのものには目新しいものはなかったが、何よりも小人数の授業であること、英語のみの授業であるため英語のインプット量が多いこと、英語圏で生活している利点を生かしていることなど、すべての授業に共通して強く印象に残っている。教授法としては、いわゆる“Communicative Approach”を基本としながら、学習内容とレベルに合わせて、いろいろな活動を組み込む、統合的あるいは折衷的なアプローチを採用していた。それは、学習者中心(student-centered)、言語使用(language use)、活動(activities)という特徴に集約できよう。

参観した授業で使用されていたテキストを一覧できるように、[表2]にまとめておいた。以下に、レベルや種類の違う5つのクラスを選び、授業の様子を記すことにする。

(ア) 初級クラス (E校)

日時： 1995年9月19日 午前9時~10時半

教師： イギリス人女性

学生： タイ人男性2名、スイス人男性2名、スイス人女性1名 計5名

テキスト： “Headway, Elementary”

[表2] 参観した授業で用いられていたテキスト

クラス	使用テキスト名 (出版社)
[初 級]	“Headway, Elementary” (Oxford U.P.)
[中 級]	“The New Cambridge English Course, Book 2” (Cambridge U.P.) “Interchange, Book 3” (Cambridge U.P.) “Intermediate Matters, Book 7” (Longman) “Headway, Intermediate” (Oxford U.P.) “Headway, Upper-Intermediate” (Oxford U.P.)
[上 級]	“Upper Intermediate Matters” (Longman) “Phrasal Verbs in Context” (Macmillan) “Meanings into Words” (Oxford U.P.)
[Cambridge PET]	“PET Preparation & Practice” (Oxford U.P.) “Focus on PET” (Collins ELT) “Passport to Cambridge PET” (Macmillan)
[IELTS]	“Speaking Personally” (Cambridge U.P.)

授業手順：

- 1) “Getting to Know You” の活動-1： 学生どうして質問し合い、紹介する活動
 - ① 相手の情報を得るための質問例を考える
 - ② ペアまたはグループでQ&A (メモをとる)
 - ③ クラス全体に相手を紹介する／名前のつづりを確かめる
 - ④ 名前の発音練習
- 2) “Getting to Know You” の活動-2： 教師についての情報を得る活動
 - ① 教師にたずねる質問を考え、ノートに書き出す／教師は適宜個人指導
 - ② 教師および参観者にQ&A
- 3) 誤りの指導： 上記の活動で教師が気づいた誤りを取り上げる
 - ① 6つの誤文を板書し、誤りを直させる
- 4) 発音指導
 - ① 母音／子音の区別 ② lives_in, years_old などの連音の発音練習
 - ② 個々の学生の弱点を取り上げて指導
- 5) テキスト Unit 9 (p.62) の学習
 - ① モデル文の音読 (指名) ② 語彙の学習
 - ③ ペアまたはグループでQ&A ④ 音節と強勢について説明

コメント：

先生は、この学校で教え始めたばかりで、授業参観の前日に前任者からクラスを引き継いだと

言う。そこで、初級クラスの学生にとって格好のテーマを選び、話す活動を中心に授業が展開された。ヨーロッパ、アジアの諸国でESLを教えた経験があるという先生は、指導力抜群で、笑顔が絶えず、学生たちをじつに上手にリードしていた。学生どうしに活動させている間は、発言をよく観察し、気づいたことをメモに取り、その後の指導にうまく生かしていた。参観者も巻き込んで授業を組み立てたのは、さすがである。

学生たちは19～25歳の社会人で、学習意欲があり、積極的に取り組んでいた。スイス人の学力がタイ人をやや上回り、学生どうしで教え合う場面も見られた。発音面では、母語からの影響が強く観察され、先生もそれが気になって、10分ほどを発音指導にさいたのであろう。5人という小人数のため、英文の誤りにも発音にも個々に対応できていた。

(イ) 中級クラス (G校)

日時： 1995年10月3日 午前9時～10時半

教師： NZ人男性

学生： 日本人を含むアジア系の男女11名

テキスト： “The New Cambridge English Course, Book 2”

授業手順：

1) 宿題のチェック

2) 過去時制を含む英文の口頭作文 (本時のユニット本文に相当する内容)

- ① 教師が白板に簡単なイラストを描き、状況設定する
- ② イラストに合う英文を指名された学生が発表する
- ③ 順に話をつなげてゆく / 2番目以降の学生は出てきた英文をすべて発表する
- ④ ペアになり、出来上がった話を相手にまとめて話す

3) 役割練習 (小道具の電話を使う)

- ① 話に出てくる登場人物3人が割り当てられ、即興で会話する
- ② 教師の批評

4) 書く活動 (テキストの練習問題)

- ① イラストのコピー (9枚セット) を配布
- ② 各自、コピーの裏にイラストの中の人物が何を言っているかを考え、書き留める
- ③ 書き終わったコピーを回収
- ④ イラストを見せながら、裏に書かれた英文を教師が読み上げる→全員で正誤を判定する

5) 聞き取り練習： 2チームに分かれて対抗

- ① 白板に、テープから流れてくる英文を構成する単語数および各単語の文字数を破線で示す
- ② 聞き取れた単語を発表する
- ③ 単語が出てこない部分は、使われている文字を推測させる / 推測が当たったら、その文字が入る箇所を教えてヒントにする

コメント：

先生はテキストの教材を完全に把握しており、学生たちはいつの間にかテキストの内容を覚えてしまうように工夫されている。そのために、話をまとめてゆく最初の活動で、指名された学生がすべての英文を完全に発表できないと次に進めないで、予想以上に時間がかかってしまった。中には集中できない学生も見かけられ、11名全員を長時間参加させることの難しさを感じさせる授業であった。

(ウ) 上級クラス (D校)

日時： 1995年9月12日 午前9時～10時半；午前10時45分～12時15分

教師： NZ人女性

学生： 台湾人女性1名、日本人男女各1名 計3名

教材： 新聞 “The Press” の記事

授業手順：

[1時限目]

1) “The Press” からの記事の学習

- ① 見出しから記事の内容を予測する ② 概要把握

2) Linking Words の学習

- ① 記事の英文から and, also, because, then, after, thus, but, even though などを見つける
② linking words の役割について

3) グループで Project に取り組むー1

- ① 新聞記事の困難語を用いて、crossword puzzle を作る

[2時限目]

1) グループで Project に取り組むー2

- ① 前時に作成した crossword puzzle の clues を作る
② 教師はときどき様子を見て、語彙の指導を行う

2) 前日の宿題 (文強勢が置かれる語を選び出す問題) のチェック

- ① 学生どうして答え合わせする ② 教師の発音を聞いて答えを確かめる
③ 音読練習 (指名)

3) 2文をまとめて1文にする練習

- ① because, so を用いて ② but, however, despite を用いて

コメント：

授業で用いられた教材は、前日の新聞からの切り抜き記事である。クライストチャーチ市民が読む日刊紙であるから、いわゆる authentic materials に相当する。“Adoption scam skirts entry law” という見出し自体も難しく、西サモア島からNZへ不正に入国する問題を取り扱った記事で、難易度の高い語彙が出てくる。そうした語彙を習得させる目的で、crossword puzzle を作るという課題を与えたものと思われる。学生たちは、3人で相談しながら、楽しそうに課題

をこなしていた。記事の学習、課題の難しさに比べると、linking wordsの学習は易しく、その間のギャップを強く感ずる授業であった。

先生の話によると、このクラスでは、時事問題・社会問題を扱った新聞記事を教材に使うことが多く、ボリビア関係の記事、排気ガスによる大気汚染の記事などを読み、それをA4サイズの画用紙にまとめ直す、壁新聞作りの課題に取り組んできたという。彼女は学生たちを組織してprojectに取り組ませる手法が得意らしく、博物館や美術館でフィールドワークを行ったり、必要とする資料・情報を自分の力で手にいれるための訓練を兼ねて、図書館に向かうこともあると言う。

(エ) Cambridge PETのクラス (F校)

日時： 1995年9月26日 午前9時～10時45分

教師： オーストラリア人男性

学生： 日本人を含むアジア系男女9名

テキスト： “PET Preparation & Practice”

授業手順：

1) Warm-up: What did you do last night?

- ① 教師が一人ずつ順番に質問し、簡単な会話を行う

2) できる限り話し続ける活動

- ① 教師と指名された学生の間でQ&Aを行い、モデルを示す
- ② 同じテーマで、①の学生が教師に向かって一方的に話し続ける
- ③ 教師が①の学生に代わって、一方的に話し続けるモデルを示す
- ④ ペアでQ&A
- ⑤ ペアを替わりながら、一方的に話し続ける練習

3) 与えられたテーマをふくらませる活動

- ① “entertainment”を例にとり、白板にmind mapを作ってゆく
- ② 同様にして自分でmind mapを作ってくることが宿題となる
- ③ 教師が一人の学生とQ&Aを行い、次々に質問するモデルを示す
- ④ 同じ学生に質問させ、質問に要領よく答えるモデルを示す
- ⑤ ペアを替わりながらQ&A
- ⑥ 話をした相手が好きな“entertainment”について、クラス全体に報告する

4) Speaking Sectionの受験要領

- ① テキストにある注意事項を確認し、その通りにできるかどうか練習する
- ② 自分に割り当てられた質問項目について、ペアを替わりながら会話を行う
- ③ 質問に対する答えをまとめて報告する
- ④ テキストの問題： 試験官の質問に対する正しい答え方を選ぶ
- ⑤ 沈黙しないためのテクニック： 試験官に聞き返す練習
- ⑥ 試験官になったつもりで質問を6つ書く／教師は適宜個人指導

⑦ 教師と一人の学生で模擬試験を行うモデルを示す

⑧ ペアを替わりながら speaking の模擬試験を行う

コメント：

今日の授業は、「会話はピンポンのように」ということに重点が置かれ、きわめて速いテンポでさまざまな活動が行われた。「嘘をついてでもいいから、話を続けなさい」というアドバイスには感心した。

先生はとてもエネルギッシュで、次から次へと活動を設定し、学生たちを動かしていた。新しい活動に移る時には常にモデルを示し、それによって学生どうしの活動がスムーズに運ぶように配慮していた。先生の話すスピードもかなり速いが、学生たちはそれによくついていっていた。ペアを組むのに人数が一人不足するため、参観者もペアの相手になったが、こちらの言う英語をよく理解し、また、たくさん話そうと努力していた。先生の指導力によるものであろうが、Cambridge PETを間もなく受験するというはっきりとした目標があるためでもあろうと思われた。

(オ) IELTS のクラス (A校)

日時： 1995年9月5日 午後3時～4時半

教師： NZ人女性

学生： 日本人男女各1名、台湾人女性1名、タイ人男性1名 計4名

テキスト： “Speaking Personally”

授業手順：

1) 参観者に、クラスメイトを順に交替しながら紹介する

2) 手相を見る活動

① テキストの 2-1 “Reading your palm” を各自で黙読

② 自分自身の手相を見る ③ ペアで手相を見る

④ 役に立つ表現の練習

3) 前日夜のテレビニュース

① 指名された学生がニュースの内容を説明

② ニュースを見なかった学生が、説明された内容のポイントを発表

③ ディスカッション

4) 宿題の指示

① テキストの11-1 “What’s your opinion?” をやってくる

コメント：

高度な内容の授業であったが、先生は学生たちの反応を見ながら質問を調節し、発言を引き出す工夫をしていた。テレビでニュースを見るようにと言われたにもかかわらず、2人の学生が見逃したため、主活動にあたるディスカッションが不活発に終わってしまったのが残念だった。ニュースはフランスの核実験に関するもので、フランス政府の主張、タヒチ島の置かれている状況、N

Z政府の態度、グリーンピースの活動など、それなりの背景知識がないと十分な討論ができない。したがって、そうした事実を確認するための質問と説明が後半の大部分を占め、話し合いにまでは至らなかった。

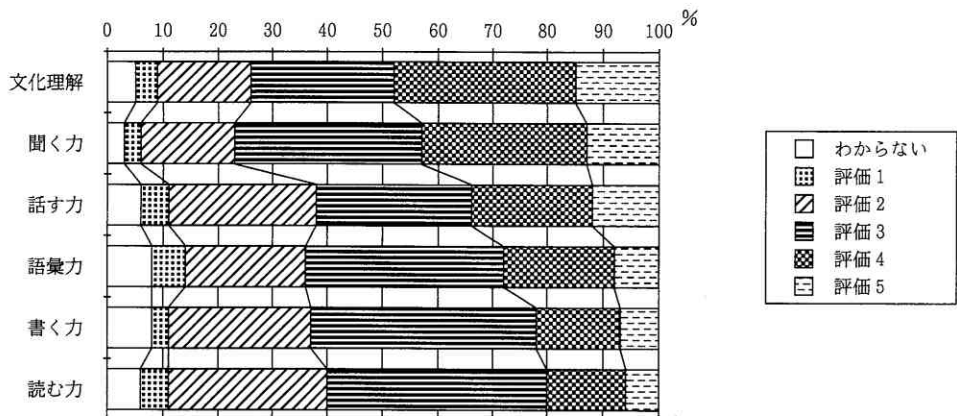
6. 語学研修の成果

アンケート項目 #18で、勉強の成果を分野別に「1（まったくない）」から「5（十分にあった）」の尺度で自己評価してもらったところ、[図1]のようになった。評価「4」と「5」の合計を見ると、「文化理解」→「聞く力」→「話す力」→「語彙力」→「書く力」→「読む力」の順に、成果があったということがわかる。

さらに、質問項目 #19で、語学研修全般についての満足度を「1（きわめて不満）」から「5（とても満足）」の尺度で答えてもらったところ、「3」（36%）と「4」（39%）で全体の75%を占めた。項目 #20で、「そのように思うのは、なぜですか」と、その理由を書いてももらった。満足度が高い（評価4～5）理由としては、目的意識がはっきりしていること、進歩の状況が自分でわかること、英語を話す環境にあることのほか、学校／授業／先生がよい（楽しい）などが目立った。一方、低目の評価（3以下）をしている場合は、授業内容、日本人が多い、自分の努力不足などをその理由にあげている。授業内容についての不満には、次のようなものがあった。

- ・文法的学習が多いこと、そして、その説明の言葉（文法用語等）が難しいこと。
- ・グラマーの時間が多く、日本人にとっては少し簡単すぎる。
- ・午前：文法、午後：発音、というカリキュラムは社会人にとってつまらない。
- ・授業の題材に好き嫌いがあるから。
- ・システムは良いが、自分のレベルとクラスが合っていない。

[図1] 語学研修の分野別成果（アンケート項目 #18）



また、わずかではあるが、次のような指摘もあった。

- 人数が11人と多いので、自分自身、リラックスができず、まったく話せない。どんどん自信がなくなっていく。NZの友達を作るのも難しい。
- 正直言って、学校よっての学習効果はあまりないように思う。

また、項目 #18のところ「その他の成果」を書き出してもらったところ、異文化理解、人的交流、日本および日本語の客観化、英語に対する慣れなどに回答が集中したが、次のように自分自身の中の変化をあげる学生もいた。

- 自分自身の成長。 • 積極性。 • 我慢強くなった。
- 気持ちが大きくなった。 • 生活がこれまでと比べて規則正しくなった。
- 自分でやりたいことが見えてきた。 • 価値観が変わった。無駄使いがなくなった。

7. 留学生がとらえた英語教育

(1) NZの場合

アンケート項目 #15で、「日本で受けた英語の授業との違いをどんな所に強く感じますか」とたずねてみた。授業の目的、学習の分野と内容、教師、クラスの雰囲気、授業運営などに違いを認め、そのほとんどが日本での授業体験を批判的に見ている。NZでの授業の雰囲気や印象が伝わってくる記述を、いくつか拾い出してみる。

- 先生はえらくない。NZでは、先生は友達です。
- ネイティブの先生のほうがわかりやすく、より実践的だと思います。例えば、どのような状況でどのような単語、また使い分けがあるかなど、バラエティーに富んでいます。
- 書く、読む、話す、聞くのバランスがととてもよくとれています。文法についても、とてもわかりやすく説明されます。
- ドラマ、ゲーム等を通して楽しく学べる。文法だけを押しつめるという感じではない。
- アットホームで、小人数制なので、発言しやすい。教科書にそって英訳するタイプの授業はほとんどない。内容がおもしろい。
- ディスカッションの時間が多い。個人個人の意見を聞いてくれて、大切にしてくれる。
- 英語でわからないことを質問する。それが相手に通じるまで、皆で考えて文章作りを手伝ってくれる。
- 文法についての繰り返し指導が日本より厳しい。自分の意見をまとめること、そしてそれを話すこと。
- 自由。詰め込み式ではない。そのかわり、自分で勉強しないと、どんどん遅れていってしまう。
- 英語で自己主張しなければならない。自己表現ができなければならない。

と、きわめて好意的であるが、次のような発言もある。

- 先生が強引。 • 全部英語で、たまに息がつまる。
- 説明もすべて英語なので、わかりにくいこともしばしば。

- ・スローペースなので、しばしばたいくつ感がある。

(2)日本の場合

前述のように、留学生たちは日本で受けた英語の授業について否定的な見方をし、

- ・日本では、話す機会が少なく、教科書を読むにしても日本語発音で注意されないの、本当にただ単語を覚えて、訳せればいいって感じで、通じない英語を習っているだけと思った。英語に興味をなくす生徒が増える教え方だと思います。
 - ・日本では先生が黒板に書いたのをノートに写すだけだった。
 - ・あまり記憶していないぐらい、英語の授業に興味がなかった。もっと生徒をひきつける授業内容にするべきだ。
 - ・日本での（中高校）授業は、書ければそれで良しとされていた。
 - ・日本での英語は実用性がかけていたと思うし、文法重視のしすぎだと思います。
 - ・読書等グラマー中心の学習が日本。日本は大学入試までも文法重視のように思う。
 - ・一番強く感じるのは、日本の英語教育は受験のためだけのものであって、それを実践に使えるものではまったくないということ。
 - ・中、高校と使えない英語を習った。ほとんどテストのための勉強。
- などと述べているが、次のように、良さを認める記述も少しあった。
- ・日本の英語の授業は、文法や単語のみに重点をおき、リーディングには向いている。
 - ・文法の教え方は日本の方がはるかにまさっている。

このような記述から予想されるように、アンケート項目 #21～23にて、「日本の英語教育」の成果を「1（まったくあげていない）」から「5（大いにあげている）」の尺度で評価してもらったところ、7割の学生が「1」または「2」と回答した。そのように考える学生の半数近く（46%）が、成果があがらない「根本的な理由」として、「日常生活で英語を使わなくてすむ」をあげている。また、「制度上の理由」では、「受験でゆがめられている」（44%）、「教え方がよくない」（43%）の2つを特に問題にし、次いで「教師の質に問題がある」（29%）、「クラスの人数が多すぎる」（26%）と考えている。

では、彼らは、日本の英語教育を改善するためにどうしたらよいと考えているのだろうか。項目 #24でたずねたところ、受験のための英語教育をやめる、会話中心の授業にする、ネイティブの教師を増やす、日本人教師の資質を高める、教材や授業方法を工夫する、等々の提言があった。主な記述を拾い出しておく。

- ・授業だけでもいいから英語をたくさんしゃべるようにして（ペアワークなど）、英語に関心を持たせる。
- ・生徒に教え込むという方法をやめて、もっと自然に遊び感覚で、まず興味をもたせることが大切だと思う。そして、「使える英語」を教えるべきだと思う。
- ・生きている英語を学ぶ状況を作る。英語圏の最近のニュースやトピックスを使い、イディオムや句動詞を学ぶ。

- ・体験的学習を多く取り入れること。文法中心から会話にも重点を置くこと。国民性の問題もあるが、自己表現をする習慣を小さい頃から育てておくこと。
- ・自分の意志、意見を持つこと。コミュニケーション訓練を多く持つこと。
- ・クラスを小人数にし、ネイティブスピーカー（それもちゃんと教育を受けた人）による教育をすべきだと思います。
- ・日本で教えている文法は、まちがいがあるし、情報不足。もっと、先生が本当の英語を知るべき。
- ・先生になる前に、海外で3年位は暮らしてほしい。
- ・英語の授業を選択にする。英語を学ぶなら、とことんやる。授業中は日本語を話すのを禁止する。
- ・レベルをできるだけ細かく分けて、その人達に合った授業をしたらいいと思う。文法も語彙力も少ない人に、スピーキング、リスニングばかり教えるのはどうかと思うし、ある程度文法とかできているのなら、主にそれらを教えた方がいいと思うからだ。
- ・若い時期（中学生～高校生）に、1年位外国にいる時と同じように勉強できる環境があればベストだと思う。

一方、次のように、日本の英語教育のよい点を指摘したり、現状もやむを得ないとする意見もあった。

- ・基本的に日本で一生懸命英語を勉強すれば、かなりの語学力はつくと思う。自分はそうでなかったなので、後悔している。
- ・日本の英語教育における文法などの教育は素晴らしいと思います。
- ・大学入試のために覚えた単語の量のおかげで、ボキャブラリーに関しては、かなり助かっています。英語教育の目的によって、どこ（どのスキル）に力を入れるかで、かなり変わると思います。
- ・大学進学者にとってはリーディングは重要であり、今の日本のレベルかそれ以上が望ましい。
- ・もっと会話に力を入れた授業を望んでいたが、やはり日本にいと、授業以外で英語にふれる機会がきわめて少ないため、かなりむつかしいと思う。
- ・教育の改善という、やはり教師の質の向上と授業内容を実用的なものにする方がいいのでは。でも、日本では英語なしでもなんのさしつかえもないので、必要のないものが身につくかどうか疑問です。

8. 教師の目から見た日本人学生

語学学校で英語を教えている教師は、日本の留学生たちをどんなふうに見ているのであろうか。アンケートを実施したわけでもないし、インタビューできたのはわずか3人であったので、客観性には欠けるが、まとめてみることにする。

(1) F校のGA先生

5節で紹介した授業で、Cambridge PETのクラスを指導していたGA先生は、日本で6年ほど教えたほか、中国、台湾、タイなどでの経験もあり、適確な判断を示してくれたように思う。彼によれば、アジア系留学生の中には、自国で失敗をし、問題をかかえてNZにやってくる者がいるが、日本人にはそういうタイプの留学生がなく、英語学習に対する動機と目的がはっきりしていると言う。ほかのアジア系留学生は、発音のくせが強く、文法の基礎ができていないことが多い。それに比べると、日本人はたとえカタカナ英語に近い発音でも理解しやすいし、文法面でも問題がなく、語彙力もある。また、ほかの国の学生が自己中心的であるのに対して、日本の学生はグループでの活動をいやがらない。

日本人の問題は、自信がないことにつきる。心理的なハードルを越えることが一番大切であると言う。そのためには、Yes, Noだけの短いやりとりで終わってしまうのを避け、話を発展できるように仕向けてやる。例えば、初対面で自分の名前を聞かれたら、名前だけでなく、いつ、誰がその名前をつけたのか、どんな意味や由来があるのかをつけ加えて答えるようにする。すると、そこから次の話題が出てきて、話の内容がふくらむ。参観した授業で、一方的に話し続ける練習をさせていたのは、こうした考えに基づいていた。見ていた限りでは、先生の意図通りに運んでいた。

GA先生の指導法は参考になることが多い。学習者が犯す誤りへの対処法もその1つである。ペアやグループで話している時には、たとえ誤りに気がついて一切直さない。その代わりに、語法やパターンの練習をしている時には、直す。しかも、理由や説明抜きで正しい表現を教え、それを学生がまねる、というやり方で直す。また、英語で日誌(journal)を書かせる場合、1~2か月の間は誤りがあっても無視する。その間に話すほうである程度の進歩があり、それが書くほうにも反映する。そうした変化を見きわめながら、徐々に誤りを指摘してやる。特に日本人は、まちがいを気にしないで、たくさん話す/書くことを第一の目標にしないと上達しない、と彼は言い切る。

(2) A校のSB先生

語学学校で教え始めて半年余りの若い先生である。彼女によると、日本人留学生は年齢によって2つのグループがあると言う。10代の若いグループ(短大生など)はとても静かで、ある程度の時間をかけないと本格的な学習ができるようにならない。授業では、定型の練習が好きで、役割練習をうまくこなす。一方、年齢の高いグループは活発で、日本で学習してきたことを活用しながら、新しいことをうまく吸収する。よく話すし、自分の意見も持っている。

それでも、ほかのアジア系の学生と比較すると、遠慮がちで、自己主張をしない。NZでの新しい学習方式に合わせて積極的になるように、そして、クラスのほかの学生にも興味を示すように、とアドバイスを与える。また、昼休みなどに日本語を使いたくても我慢し、たとえ日本人どうしでも英語で話すようにと言う。

(3) I校のRA先生

クライストチャーチの語学学校で教えている、たぶん唯一の日本人である。日本の予備校で13

年ほど英語を教えてから、NZにやって来られた。ご主人はNZ人で、新聞社勤務のカメラマン。

彼女によると、高校卒業後すぐにやって来る日本人は勉強と遊びが半々であるのに対して、社会人で留学している比較的年長の学生はとても真剣に取り組んでいる。日本語で説明すると簡単なのだと思うようなこともよくあるが、学校の方針でもあるし、クラスには中国や台湾などからの学生もいるので、授業はあくまでも英語のみで行う。

日本人は概して、留学したことに対する期待が大きく、例えば、NZに来て3か月ほどしかたっていないのに、「テレビのニュースが聞き取れない」などと言ってくる学生がいる。「英語圏にやれば自動的に英語力がつく」と思ったら大間違い、と厳しい口調で言っておられた。

それでも力をつける学生が必ずいて、中学卒業後すぐに社会に出、6年間働いて貯めたお金で留学し、予想以上の成果を上げた男性の話、短大を出てからNZに留学し、半年ほどの間に大学入学レベルの英語力に達した女性の話などを聞かせていただいた。

9. 結び

英語圏で語学研修をしようと海外にでかける人たちは、もともと日本での英語学習の限界を何らかの形で感じた人たちである。海外に出向いたからといって簡単に英語力が身につくものではないが、それでも、そういう人たちは、一定の目的を持って出かけて行く。

今回クライストチャーチにて調査できた留学生の多くは、個人差はあるものの、それなりの成果をあげているようである。また、日本の英語教育に対して、かなり痛烈な批判を浴びせている。学生たちの感想や意見は、あくまでも個人的な体験に基づくものではあるが、このように集計・分析してみると、それなりに説得力があるように思う。

日本の英語教育に携わる者としては、できることなら、彼らのように学習の目的と意欲を持った生徒・学生に対して効果的な授業を提供したいと願う。せめて、彼らが語学留学に出かけて「日本で受けた英語の授業が役立った」と思えるような学習ができるように努力したいものである。

インタビューに応じてくれたGA先生は、日本で教えた経験から、日本の英語教育を改善するためのポイントを3つ示してくれた。その1つは環境作りで、英語を勉強する雰囲気を出すことと、授業でわいわいがやがやと話す練習をしても、ほかの授業の迷惑にならないような設備を確保すること。2つ目は、クラスの人数を減らすこと。「40人というのは絶望的だ」と言う。3番目は試験で、現在のような筆記試験中心のやり方を変えること。どれも難しいことではあるが、不可能なことではない。できるところから、少しずつ改善していったらどうか。

GA先生はF校で教え始めて1年、その直前まで日本で教えていた。主に大学・短大レベルであったが、最後の2～3年は学生たちが変わったという印象を持っている。英語で話すということに対する抵抗感のようなものが少なくなった、と言うのである。10年ほど前(1987年)に導入されたJET制度により、ネイティブの若い先生たちが中学校や高校で教えるようになったことの影響ではないかと、彼は分析する。G校で教員養成の話をしてくれたCC先生も、ここ数年日

本からやって来る学生の同じような変化を指摘していた。1つの明るい材料ではある。

注

1 ケンブリッジの英語検定試験 (Cambridge EFL examinations) は、UCLES (=The University of Cambridge Local Examinations Syndicate) の監督下で行われているが、クライストチャーチでは、H校がテスト実施機関として認可された唯一の学校である。

一番下のレベルから、PET (=Preliminary English Test), FCE (=First Certificate in English), CAE (=Certificate in Advanced English), CPE (=Certificate of Proficiency in English) の4種類があったが、94年末より、さらにレベルの低いKET (=Key English Test) が加わった。いずれも、リーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4分野でテストされる。また、これらとは別にCertificate in English for Business and Tradeという商業英語の資格試験もある。これは、ほぼCAEのレベルに相当すると言われている。

PETを例にとると、まずリーディングとライティングのテストが90分、次にリスニングのテストが45分行われる。最後にスピーキングのための面接テストが10~12分実施される。4つの分野に25%ずつの比重が置かれ、総合点で判定される。クライストチャーチでは、95年に3回実施されている。

なお、日本では、主としてブリティッシュ・カウンシル (The British Council) にて年2回実施されているが、レベルが3つほどに限られている。

2 IELTSとはInternational English Language Testing Systemの略で、「アイ・エルツ」と発音する。イギリスをはじめ、オーストラリアやNZの高等教育機関で勉強するための英語力を総合的に測定するテストで、TOEFLに比較すると、スピーキングとライティングの技能も必ずテストされることに特色がある。クライストチャーチでは、Christchurch Polytechnicが、UCLESより正式に認可された唯一のテスト実施機関である。95年度には、8回実施されている。

リーディングとライティングに関しては、大学の専攻分野に応じて、モジュールA (理科系) モジュールB (生命科学系) モジュールC (文科系) が用意されていたが、95年度から1つに統一された。リーディングの新しいテストは、3つのセクション、約40の設問からなり、60分で実施される。ライティングでは、60分の間に2つの作文を書くことが要求される。1つの課題では150語、もう1つの課題では250語という最低語数が指定されている。

リスニングは30分間で行われる。4つのセクション、約40問からなり、テープを聞きながら問題に取り組むが、1回しか聞けないので、かなりの集中力が要求される。テスト終了後、答案用紙に答えを写す時間が10分与えられる。スピーキングは10分から15分で実施される。試験官の質問に答える一方、受験者自身も試験官に質問することが要求される。実際のテストが始まる前に、簡単な履歴や受験理由などを書く用紙が配られ、その情報をもとにしたやりとりが面接に含まれる。また、何らかの課題がテスト中に与えられ、それに基づいた質疑応答も行われる。

テストの結果は、“Bands” と呼ばれる1から9までの数値で示される。大学で学士号を取得するための英語力としては、6~7ポイント (TOEFLの550~600点に相当) が必要と言われている。

なお、日本では毎月3回ほど、東京と京都のブリティッシュ・カウンシルにて実施されているほか、大阪と名古屋でも月1回の割合で行われる。

3 主として、JACETの英語教育実態調査研究会の行った、大学生向けおよび社会人向けのアンケートを参考にした。

4 ワーキングホリディ (Working Holiday) は、もともとイギリス連邦内での若者たちの交流を促進する目的で始まった制度である。1980年に、日本とオーストラリアとの間で協定が交わされ、これと同じ主旨の制度が導入された。次いで85年にNZと、86年にカナダとの間でも同様の協定が結ばれた。それによると、18~25歳 (NZのみ30歳まで) の青年が、就労ビザを取得することなく、それぞれの国で働きなが

ら旅行することができる。したがって、オーストラリアやNZの若者がこの制度を利用して、日本にもやって来ている。日本人がこの制度を利用して出かける場合、オーストラリアとNZは12か月まで、カナダは6か月まで（現地で6か月延長可能）滞在できる。

〔参考資料〕

Lyn Connor “Living in New Zealand: A Guide for Immigrants” (GP Publications, 1995)

Michael Garbutt & Kerry O’Sullivan “IELTS: Strategies for Study”

(Macquarie University, 1995)

Statistics NZ “New Zealand in Profile 1995” (Statistics NZ, 1995)

UCLES, the British Council and IDP Education Australia “The IELTS Handbook”

(UCLES, 1996)

語学学校各種パンフレット類

小池生夫他 『わが国の英語教育に関する実態と将来像の総合的研究(Ⅱ)－学生の立場－』

(英語教育実態調査研究会、1985年)

同 『職業人から見た英語教育に関する実態と将来像の総合的研究』(同研究会、1990年)

「地球の歩き方」編集室 『成功する留学：オーストラリア&ニュージーランド留学』

(ダイヤモンド社、1992年)

毎日留学年鑑刊行会 『留学ナビ：ワーキングホリデー編』(毎日コミュニケーションズ、1996年)

[資料] 語学留学に関するアンケート：集計結果（自由記述部分を除く）

[A] あなた自身について

0. 性別

- | | |
|------|-------------|
| 1. 男 | 49名 (39.8%) |
| 2. 女 | 74 (60.2) |

1. 年齢

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 15～19歳 | 27名 (22.0%) |
| 2. 20～24歳 | 63 (51.2) |
| 3. 25～29歳 | 24 (19.5) |
| 4. 30～34歳 | 2 (1.6) |
| 5. 35～39歳 | 2 (1.6) |
| 6. 40代 | 1 (0.8) |
| 7. その他 | 3 (2.4) |
| 無回答 | 1 (0.8) |

2. 所属

- | | |
|----------|-----------|
| 1. 高校／高専 | 5名 (4.1%) |
| 2. 専門学校 | 2 (1.6) |
| 3. 短期大学 | 5 (4.1) |
| 4. 4年制大学 | 19 (15.4) |
| 5. 大学院 | 0 (0.0) |
| 6. 社会人 | 23 (18.7) |
| 7. その他 | 66 (53.7) |
| 無回答 | 3 (2.4) |

3. 以前、海外で生活したことはありますか： [2つ以上の経験がある場合は、それを合計してください]

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. ない | 67名 (54.5%) |
| 2. 3ヶ月以内 | 41 (33.3) |
| 3. 6ヶ月以内 | 1 (0.8) |
| 4. 1年以内 | 6 (4.9) |
| 5. 2年以内 | 4 (3.3) |
| 6. 2年を超える | 3 (2.4) |
| 無回答 | 1 (0.8) |

[B] 英語の学習歴

4. 中学校入学以前に英語を習ったことがありますか： ある場合、どのようにして習いました

か [2つ以上選んでもかまいません]

1. ない	9 2名 (74.8%)
2. 幼稚園で	1 (0.8)
3. 小学校で	0 (0.0)
4. 塾などで	2 2 (17.9)
5. 家族の者に	1 (0.8)
6. 個人教授	4 (3.3)
7. その他	2 (1.6)
無回答	2 (1.6)

5. 中学校以降、課外で（自分で）英会話の学習をしたことがありますか： ある場合、学習方法として該当するものを選んでください [2つ以上選んでもかまいません]

1. ない	4 2名 (34.1%)
2. ラジオ講座	2 1 (17.1)
3. テレビ講座	1 7 (13.8)
4. テープ類を用いて	1 8 (14.6)
5. 英字新聞、雑誌類を用いて	6 (4.9)
6. 英会話学校	4 5 (36.6)
7. 個人教授	1 1 (8.9)
8. クラブ／サークル活動	5 (4.1)
9. その他	4 (3.3)
無回答	1 (0.8)

6. 英語の資格試験や留学生試験を受けたことがありますか： [2つ以上選んでもかまいません]

1. ある（英検）	7 1名 (57.7%)
2. ある（英検以外の資格試験：TOEFL, TOEICなど）	2 6 (21.1)
3. ある（AFS, ロータリーなどの留学生試験）	0 (0.0)
4. ないが将来受ける予定	2 8 (22.8)
5. ない。将来も受けない。	1 4 (11.4)
無回答	1 (0.8)

[C] ニュージーランド (=NZ) 語学留学の動機・目的

7. 今回、海外で語学研修するようになったきっかけは何ですか： [2つ以上選んでもかまいません]

1. なんとなく	7名 (5.7%)
2. 親が勧めたから	4 (3.3)
3. 先生が勧めたから	1 (0.8)
4. 友達に誘われたから	1 (0.8)

- | | | |
|-----------------------------|-----|--------|
| 5. 仕事の都合で | 4 | (3.3) |
| 6. 奨学金をもらったから | 1 | (0.8) |
| 7. 日本の生活がいやになったから | 1 2 | (9.8) |
| 8. 海外で生活したいと思っていたから | 5 4 | (43.9) |
| 9. 日本の英語教育ではダメだと思ったから | 1 5 | (12.2) |
| 10. 英語圏の文化・社会に触れたかったから | 4 1 | (33.3) |
| 11. 親類／知人がいるから | 1 6 | (13.0) |
| 12. 本物の英語に触れたかったから | 3 6 | (29.3) |
| 13. 英語圏で暮らすのが英語に上達するよい方法だから | 6 3 | (51.2) |
| 14. 語学学校の広告を見て | 1 | (0.8) |
| 15. ワーキング・ホリデイの制度が利用できるから | 2 1 | (17.1) |
| 16. その他 [書いてください] : | 2 3 | (18.7) |
8. 今回の語学留学の目的は何ですか: [2つ以上選んでもかまいません]
- | | | |
|-----------------------------|-------|---------|
| 1. 特定の目的はない | 1 2 名 | (9.8%) |
| 2. 日常会話 (聞く・話す) ができるようになるため | 6 7 | (54.5) |
| 3. 英語力の全体的なレベルアップのため | 4 9 | (39.8) |
| 4. 英語的な感覚を身につけるため | 2 1 | (17.1) |
| 5. 英語圏の文化を理解するため | 1 9 | (15.4) |
| 6. 仕事で英語を使うため | 3 1 | (25.2) |
| 7. 将来、英語圏の大学で勉強するため | 1 8 | (14.6) |
| 8. 将来、英語圏で生活するため | 1 3 | (10.6) |
| 9. その他 [書いてください] : | 1 5 | (12.2) |

[D] 語学研修について (質問11~13で、複数のクラスに所属の場合、主たるクラスについて、または全体を平均して答えてください)

9. NZで語学研修を始めてどのくらいになりますか:
- | | | |
|-------------|-------|---------|
| 1. まだ始めたばかり | 1 9 名 | (15.4%) |
| 2. 1ヶ月以内 | 1 1 | (8.9) |
| 3. 3ヶ月以内 | 2 8 | (22.8) |
| 4. 6ヶ月以内 | 3 3 | (26.8) |
| 5. 1年以内 | 1 6 | (13.0) |
| 6. 1年を越える | 1 5 | (12.2) |
| 7. 2年を越える | 1 | (0.8) |
10. これから、どれくらいの期間、NZで語学研修を続ける予定ですか:
- | | | |
|------------|-------|---------|
| 1. まだわからない | 1 0 名 | (8.1%) |
| 2. 1ヶ月以内 | 2 4 | (19.5) |

3. 3ヶ月以内	30	(24.3)
4. 6ヶ月以内	19	(15.4)
5. 1年以内	26	(21.1)
6. 1年を超える	7	(5.7)
7. 2年を超える	7	(5.7)

11. 英語クラスのレベルは、あなたにとってどの程度ですか：

1 (とても低い)	1名	(0.8%)
2	21	(17.1)
3	65	(52.8)
4	29	(23.6)
5 (とても高い)	5	(4.1)
無回答	2	(1.6)

12. 英語クラスの授業内容は、あなたの希望とどの程度合っていますか：

1 (まったく合わない)	2名	(1.6%)
2	18	(14.6)
3	40	(32.5)
4	41	(33.3)
5 (とても合う)	20	(16.3)
無回答	2	(1.6)

13. あなたのクラスの人数を書いてください：

3人	4名	(3.3%)
4	13	(10.6)
5	9	(7.3)
6	13	(10.6)
7	18	(14.6)
8	14	(11.4)
9	12	(9.8)
10	15	(12.2)
11	15	(12.2)
12	9	(7.3)
無回答	1	(0.8)

14. 何人の先生に教えてもらっていますか：

1人	24名	(19.5%)
2	69	(56.1)
3	7	(5.7)

4	17	(13.8)
5	1	(0.8)
6	1	(0.8)
7	0	(0.0)
8	1	(0.8)
9	0	(0.0)
10	1	(0.8)
無回答	2	(1.6)

15. 日本で受けた英語の授業との違いをどんな所に強く感じますか： [自由に書いてください]

16. 正規の英語クラス以外に、自分で1日どのくらい英語の勉強をしていますか：

0時間	8名	(6.5%)
1	55	(44.7)
2	25	(20.3)
3	21	(17.1)
4	5	(4.1)
5	1	(0.8)
無回答	8	(6.5)

17. どこに住んでいますか：

1. ホームステイ (単独)	72名	(58.5%)
2. ホームステイ (他の日本人学生と)	3	(2.4)
3. ホームステイ (他の外国人学生と)	12	(9.8)
4. アパート (単独)	4	(3.3)
5. アパート (他の日本人学生と)	4	(3.3)
6. アパート (他の外国人学生と)	20	(16.3)
7. 寮	1	(0.8)
8. 親類/知人の家	1	(0.8)
9. その他	4	(3.3)
無回答	2	(1.6)

18. 語学研修の成果はどの程度あがっていると思いますか、自己評価してください：

[わからない場合は、0を○で囲んでください]

(1) 聞く力	0	4名	(3.3%)
	1 (まったくない)	4	(3.3)
	2	20	(16.3)
	3	43	(35.0)
	4	36	(29.3)

	5 (十分にあった)	1 6 (13.0)
(2) 話す力	0	7名 (5.7%)
	1 (まったくない)	4 (3.3)
	2	3 4 (27.6)
	3	3 7 (30.1)
	4	2 8 (22.8)
	5 (十分にあった)	1 3 (10.6)
(3) 読む力	0	7名 (5.7%)
	1 (まったくない)	5 (4.1)
	2	3 8 (30.9)
	3	4 9 (39.8)
	4	1 8 (14.6)
	5 (十分にあった)	6 (4.9)
(4) 書く力	0	8名 (6.0%)
	1 (まったくない)	4 (3.3)
	2	3 6 (29.3)
	3	5 0 (40.7)
	4	1 9 (15.4)
	5 (十分にあった)	6 (4.9)
(5) 語彙力	0	8名 (6.5%)
	1 (まったくない)	7 (5.7)
	2	3 2 (26.0)
	3	4 1 (33.3)
	4	2 8 (22.8)
	5 (十分にあった)	7 (5.7)
	0	6名 (4.9%)
	1 (まったくない)	5 (4.1)
	2	2 1 (17.1)
	3	3 2 (26.0)
	4	4 0 (32.5)
	5 (十分にあった)	1 9 (15.4)

(7) その他 [これ以外の成果を具体的に書いてください]

19. 語学研修全般について、これまでのところどう思っていますか：

1 (きわめて不満)	3名 (2.4%)
2	1 3 (10.6)

3	4 4	(35.8)
4	4 8	(39.0)
5 (とても満足)	1 3	(10.6)
無回答	2	(1.6)

20. そのように思うのは、なぜですか： [具体的に書いてください]

[E] 日本の英語教育について

21. 日本の中学校、高校、大学などでの英語教育はかならずしも成果をあげていないと言われますが、どう思いますか：

1 (まったくあげていない)	3 2 名	(26.0%)
2	5 4	(43.9)
3	2 8	(22.8)
4	7	(5.7)
5 (大いにあげている)	1	(0.8)
無回答	1	(0.8)

22. (質問21で、1か2と答えた人に) 成果をあげていない根本的な理由は何だと思えますか：

[2つ以上選んでもかまいません]

1. 日常生活で英語を使わなくてすむ	5 7 名	(46.3%)
2. 日本人は、あまり自己主張しない	2 7	(22.0)
3. 日本人は、言葉による表現があまり得意でない	1 6	(13.0)
4. 日本人は完璧主義のため、細かいところを気にしすぎる	2 5	(20.3)
5. 英語と日本語の違いが大きい	2 9	(23.6)
6. その他	2 3	(18.7)

23. (質問21で、1か2と答えた人に) 成果をあげていない制度上の理由は何だと思えますか：

[2つ以上選んでもかまいません]

1. 授業時間が少ない	1 0 名	(8.1%)
2. クラスの人数が多すぎる	3 2	(26.0)
3. 好き嫌いに関係なく、全員に教えている	2 3	(18.7)
4. 受験でゆがめられている	5 4	(43.9)
5. 教科書がよくない	2 0	(16.3)
6. 施設・設備がよくない	5	(4.1)
7. 教師の質に問題がある	3 5	(28.5)
8. 教え方がよくない	5 3	(43.1)
9. その他	1 1	(8.9)
無回答	2	(1.6)

24. 日本の英語教育を改善するためには、どうしたらよいと思えますか、あなたの提言を書いてください。